

【国語科】教科提案

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる ～豊かな言語感覚に根ざした対話を通して～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

今年度学校提案では、学びの質の高まりをめざす手立てとして「課題に向かう対話」をあげている。本校国語科では、学習における一人読みを特に大切にしている。まず、この一人読みにより、学習課題を通して対象との対話・自己との対話となされる。次に、学習課題についての小グループや全体での話し合いを通して他者との対話となされる。これにより、一人ひとりがもっていた学習課題が仲間と協同で追究すべき自己の課題へと高まる。「他者との対話」により学びの質を高めるには、他者に対して、本当に伝わる重みや価値を持った読みや発言を生み出す必要がある。そのためには、一人読みや話し合いの際に、一つ一つの言葉にこだわった読みや表現が積み重ねられなければならない。そして、発言するだけでなく、互いに意見を交わすときに相手の意図をくみ取ったり、自分の考えと比較しながら積極的に聞くということが必要になる。

その際、大切にしたいのは一人ひとりがもつ豊かな言語感覚である。本校国語科では、言語感覚を以下のように定義したい。

- ・文章中や会話に使われる語句や文の正誤・適否・美醜を的確に判断すること。
- ・表現の微妙なニュアンスを敏感にとらえること。
- ・言葉が醸し出す味わいを感覚的にとらえること。

子どもたち一人ひとりが語彙を増やし、場や相手に応じて正しく適切に自分の思いを表現できれば、自分の考えを明確に伝えることができる。また、言語感覚が育つことで他者の多様な考えを的確に受容でき、認識を更新させることが容易になる。

また、対象との対話・自己との対話においても、対話は基本的に言語を通して行われることから、豊かな言語感覚が育つことで、より質の高い対話が可能になるだろう。

そして、「対象」「他者」「自己」の三つの対話により、言葉と言葉、文と文のつながりを考える中で「論理力」が育てられる。表現の微妙なニュアンスなどを検討したり、実際に他者との対話の中で適切な言葉が使われることにより「表現力」が育てられる。そして、文章に直接書かれていない部分を文脈から想像することや他者との対話により新たな視点に気づくことで「発想力」が育てられる。この「発想力」「論理力」「表現力」こそが、質の高い学びを支える力となる。また、実際の生活で活用できる生きた力となり他教科・領域での対話に活用できると考える。

また、「発想力」「論理力」「表現力」が育つことで、豊かな言語感覚に根ざした対話がより確かなものになる。言語感覚と「発想力」「論理力」「表現力」は相互作用として働くものであり、共に育てていきたい。

本校国語科では、子どもたちが豊かな言語感覚を駆使して自分たちの言葉で対話を繰り返す、より質の高い学びを実現していきたい。そこで、研究主題を「『発想力』『論理力』『表現力』を育てる～豊かな言語感覚に根ざした対話を通して～」と設定し、研究を進めることとした。

(2) 国語科でめざす子ども像

一人の子の発言、たった一つの鍵となる言葉からでも、全員が課題に向かって考えられることが、質の高い学びには必要である。そのために、言葉にこだわり積極的に聞くことができる子を育てていきたい。

対話は、仲間の発言を自分の読みと比較・吟味し、子どもたち同士が意見をつないだり返したりしていくことで高まっていく。子どもたちが発言者の発言内容の鍵になる言葉を自分の中に積極的に取り込み、自分の中で「対象」「自己」との対話を経て、再度「他者」との対話ができる子を育てたい。

具体的には、「〇〇君の意見に賛成で～。」「△△さんの意見と似ていて～。」といった発言の型から入るが、最終的には自己の課題の核の概念につながっていける対話ができるようにしていきたい。例えば、「もう一度～の部分詳しく言ってもらえますか。」「今の意見は～の部分がよくわからないのだけれども。」「ぼく言葉で言ってみると～だと思うけれど、それでもいいですか。」といったものである。

その際、文章に書かれている部分や仲間の発言の鍵となる言葉に根拠を持ちながら発言をつないでいけるようにしていきたい。

2. 国語科学習における「学びの質の高まり」

国語科学習における「学びの質の高まり」は、子どもたちが対話においてどの言葉にこだわることができ、その発言に対して、どう反応し、対象・他者・自己との対話をしていけるのかに大きく影響される。

2年生教材『黄色いバケツ』最後の場面「にこっとわらってみせました。」の部分为例にしてみたい。「きつねの子は悲しい気持ちなのか」という課題に対して、「かなしい」と「そうではない」の2つに意見が分かれた。「そうではない」派の根拠は「にこっとわらってみせました」なので、笑っているのだから、悲しくないというものである。それに対して、「かなしい」派の1人が、「最後に、『にこっとわらってみせました。』と書いてある。『わらってみせた』とあるので『わらいました』じゃない。『みせた』ということは、本当は悲しいという気持ちがある。」と発言した。ここで、子どもたちは「わらった」と「わらってみせた」の言葉の違いからきつねの子の気持ちをより深く考えることができたのである。

このようなことから、豊かな言語感覚を持ち、ほんの少しの意味の違いや表現方法の違いなども比較検討できてこそ、三つの対話が深まり、学びの質が高まると考える。

「話す」 「聞く」	他者との対話において、互いの言葉を一度自分の中に取り込んで比較・検討していけること。また、対話の中で、新たな視点を獲得したり、根拠を加えることができた。新たな発想を得たりすることができること。
「読む」	対象との対話において、表現の微妙なニュアンスを敏感にとらえ、言葉の一つ一つについてその効果に気づき適否を検討できること。
「書く」	対象・自己との対話において、話す・聞く・読むことで身につけた表現や語彙を駆使して文章の正誤・適否を考えながら、自分の考えを書き表すことができること。

3. 研究の展望

研究に対する取り組みを「対象」「他者」「自己」の三つの対話ごとに述べていきたい。

① 対象との対話

対象との対話を行う際、文章に即して考え、根拠を文中の記述や言葉に求め、文と文、言葉と言葉の関係について考えることを重視した一人読みをさせた。また、一人ひとりの語彙を増やす取り組みを行い、すぐれた表現の文にふれさせることで、一つ一つの言葉に敏感になるよう指導してきた。そうすることで、「その言葉を他の言葉に置き換えるとどうなるのか。」「登場人物の様子や言葉にどのような表現を付け加えればよりわかりやすくなるのか。」といった言葉にこだわった対話ができるようになった。そして、対話を繰り返すことで、一人ひとりがより豊かな言語感覚を持ち相互的により質の高い対話ができるようになった。これらのことで、「発想力」「論理力」「表現力」を育ててきた。

② 他者との対話

積極的に相手の意見を聞き、自他の意見の違いを比べながら、相手のよさを評価し自分に取り込んでいける聞く力を身につけてきた。また、相手の言葉に自分の言葉を重ね合わせながら、自分の認識を更新した意見を話す力も身につけてきた。低学年ではペアでの対話からはじめ、中学年以降では小グループによる話し合いへと発展させていった。その際、自分たちで主体的な学習ができるように話し合いの手だてについてのあり方についても検討してきた。また、聞き手を意識した話型指導から入り、徐々に自分の言葉を作りながら、自然で説得力のある対話ができるよう、系統的に指導してきた。このことで、「発想力」と「表現力」を育ててきた。

③ 自己との対話

自分自身を見つめ、課題についての高まりや変容に気づき、さらなる課題へと発展させていけるようにするためにも、書く活動のあり方を検討してきた。書くという活動は常に自己との対話が行われ、思考が整理されていく。このことで特に「表現力」「論理力」を育ててきた。
また、自己評価活動を積極的に取り入れ、自己の高まりや、他者の変容に気づき自他への「認識の更新」を行うことで、さらなる学びの意欲へとつなげてきた。

4. 研究の評価

長期的な成果と課題の把握については、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士の比較によって行った。また、一つの単元やそれぞれの授業についても発言やノート・ワークシートへの記述内容などにより、現状把握に努めた。また、学校提案の「学びの質の高まり」を検討することからも、授業記録をとり、子どもたちの学びの実際をできる限りくわしく記述することにより学びの質の高まりをとらえてきた。

「発想力」「論理力」「表現力」の高まりについては、発達段階や対象のもつ意味をふまえて以下以下の観点を中心に評価した。

- ・「発想力」…課題に対して加えられた視点や語彙の豊かさなど。
- ・「表現力」…話し方や読み方・表現活動の実際など。
- ・「論理力」…主題や論点・根拠の確かさなど。

参考文献

『事例から学ぶ はじめての質的研究法 教育・学習編』 秋田喜代美・能智正博 編
『認知心理学からみた読みの世界～対話と協同学習をめざして～』 佐藤公治 著
『授業研究と談話分析』 秋田喜代美 著
『小学校学習指導要領解説 国語編』 文部科学省